Komaba Tuition Centre
KOMABA

高校　３年生

１学期中間考査

古典対策

十訓抄「成方といふ笛吹き」

名前

『十訓抄』

◆◆通釈◆◆

成方という笛吹きがいました。御堂入道殿より大丸という笛を頂戴して吹いていました。立派な物（笛）なので、伏見修理大夫俊綱朝臣が（この笛を）欲しがって、「千石で買おう。」といったのですが、（成方は笛を）売らなかったので、（伏見修理大夫俊綱朝臣は）たくらんで使いの者を（成方のもとに）行かせて、「（成方が笛を）売るという旨のことを言った。」と嘘を言うように言いつけておいて、成方を呼びつけて、「（お前が私に）笛を渡そうと言ったのは、（私の）望むところである。」とよろこんで、値段は（お前の）言い値にしよう。」と、（そして）「ぜひとも買おう。」と言ったので、成方は顔色を失って、「そのようなことは申しません。」と言いました。（伏見修理大夫俊綱朝臣は）この使いの者を呼びつけて、お尋ねになると、「本当に申しました。」と（使いの者）が言うので、俊綱はおおいに怒って、「人を欺こうとするとは、その罪は軽くはないぞ。」といって、（成方を）雑色所へ下げて、木馬に乗せようとする間に、成方が言うことには、「身のお暇を頂き、この笛を持ってまいりましょう。」と言ったので、（俊綱は成方に）人をつけてやりました。（成方が）帰ってきて、腰から笛を抜き出して言うことには、「このせいで、このような目にあっている。薄情な笛だ。」と、軒先に下りて、石をとって、灰のように（なるまで）打ち砕いてしまいました。伏見修理大夫俊綱朝臣の、笛を横取りしようと思う心が強いために、いろいろな計画を練ったのですが、（笛がこなごなになってしまった）今となっては言っても仕方がないので、（成方を）罰する必要もなく、解放しました。後に聞くことには、そうではない（本物ではない）笛を大丸といって打ち砕き、本当の大丸は支障なく吹いていたので、伏見修理大夫俊綱朝臣のばかけだことだということで（この話は）済んでしまいました。はじめはひどく勢い込んでいましたが、最終的には（成方に）出し抜かれてしまいました。昔、趙の文王が、和氏の璧（という名玉）を、宝として（持って）いました。秦の昭王は、どうにかしてこの玉を自分のものにしたいものだと思い、使者を（趙に行くよう）命じて、十五の城を分配するので、玉（和氏の璧）と取り換えよう。と申し上げました。趙王は、ひどく悲嘆しびっくりして、藺相如を使者として、玉を持たせて秦に行かせました。昭王は、（玉を手に）持って返そうともしなかったので、（藺相如は）策略を思い巡らして、「心身を清めた人でなければ、この玉を取ること（があって）はなりません。」と言って、玉を頼み求め（うまくだまして）受け取ったあと、急に怒った表情をして、柱をにらんで、玉を叩き割ろうとしました。そのときに秦王は、（藺相如のことを）許して（趙の国に）返しました。玉こそ粉々にしてはいませんが、成方の有様は、互いに似ています。

次の文章を読んであとの問いに答えよ。

成方といふ笛吹きアありけり。御堂入道殿より大丸といふ笛を賜はりて吹きけり。めでたきものなれば、伏見修理大夫俊綱朝臣欲しがりて、「千石に買はむ。」とありけるを、売らざりければ、たばかりて使ひをやりて、「売るべきの由言ひけり。」と虚言を言ひつけて、成方を召して、「笛得させむと言ひける、本意なり。」とよろこびて、「価はイ乞ふによるべし。」とて、「ただ買ひに買はむ。」と言ひければ、成方①色を失ひて、「②さる事申さず。」と言ふ。この使ひを召し迎へて、尋ねAらるるに、「まさしく申し候ふ。」と言ふほどに、俊綱大きに怒りて、「人を欺きすかすは、その咎軽からぬ事なり。」とて、雑色所へ下して、木馬に乗せむとする間、成方曰はく、「身の暇を給はりて、この笛を持ちて参るBべし。」と言ひければ、人をつけてつかはす。帰り来て、腰より笛を抜き出でて言ふやう、「このゆゑにこそ、③かかる目は見れ。④情けなき笛なり。」とて、軒のもとに下りて、石を取りて、灰のごとくに打ち砕きつ。大夫、笛を取らCむと思ふ心の深さにこそ、様々かまへけれ、今は

ウ言ふかひなければ、戒むるに及ばずして、⑤追ひ放ちにけり。後に聞けば、あらぬ笛を大丸とて打ち砕きて、もとの大丸はささいなく吹きゆきければ、大夫のエをこにてやみDにけり。はじめは、⑥ゆゆしくはやりごちたりけれど、⑦つひに出だしぬかれにけり。

昔、趙の文王、和氏が璧、宝とせり。秦の昭王、いかでこの玉を得てしがなと思ひて、使ひを遣はして、「十五城を分かちて、玉に換へん。」と聞こゆ。趙王、大きに嘆き驚きて、藺相如を使ひとして、玉を持たせて秦にやる。昭王、うち取りて返さむともせざりければ、謀をめぐらして、「潔斎の人にあらざれば、この玉を取ることなし。」と言ひて、玉を請ひ取りてのち、にはかに怒れる色をなして、柱をにらみて、玉をうち割らむとす。時に秦王、許して返しEてけり。⑧玉をこそ砕かねども、成方が風情、あひ似たり。

（『十訓抄』より）

問一　波線A～Eの助動詞の意味と活用形をそれぞれ選択肢より選んで答えよ。同じ記号を二度以上用いてもよい。

A「らるる」【　　】　　B「べし」【　　】　　C「む」【　　】

D「に」【　　】　　E「て」【　　】

〈選択肢〉

ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　終止形　　エ　連体形　　オ　已然形　　カ　命令形

キ　打消　　ク　完了　　ケ　意志　　コ　婉曲　　サ　推量　　シ　当然

ス　尊敬　　セ　受身　　ソ　断定

問二　二重傍線ア～エの用言の活用の種類と活用形を答えよ。

ア「あり」　活用の種類【　　】　活用形【　　】形

イ「乞ふ」　活用の種類【　　】　活用形【　　】形

ウ「言ふかひなけれ」　活用の種類【　　】　活用形【　　】形

エ「をこに」　活用の種類【　　】　活用形【　　】形

問三　傍線①「色を失ひて」とあるが、成方はどの様な状態か。三十字以内の現代語で説明せよ。

問四　傍線②「さる事」の具体的内容を、解答欄に適する形で、古文中より五字以内で書き抜け。

【　　】と言ったこと。

問五　傍線③「かかる目」の具体的内容を三十字以内の現代語で説明せよ。

問六　傍線④「情けなき笛」の現代語訳として適当なものを選択肢より選べ。

ア　みすぼらしい笛
イ　薄情な笛
ウ　無風流な笛
エ　名残惜しい笛
オ　恐ろしい笛

問七　（1）傍線⑤「追ひ放ちにけり」とあるが、誰が誰を解放したのか。空欄に適語を書け。

【　　】が【　　】を解放した。

（2）解放した理由を三十字以内の現代語で説明せよ。

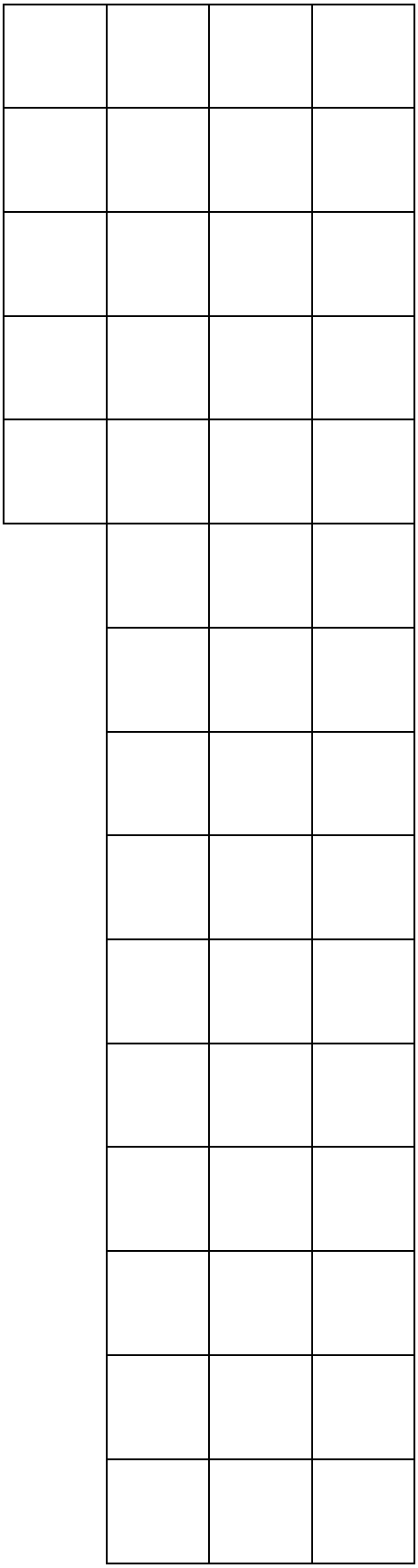
問八　傍線⑥「ゆゆしくはやりごちたりけれど」を現代語訳せよ。

【　　】

問九　傍線⑦「出しぬかれにけり」とあるが、成方はどの様にして窮地を脱することができたか。現代語で簡潔に説明せよ。

【　　】

問十　傍線⑧「玉をこそ砕かねども、成方が風情、あひ似たり」とあるが、成方と藺相如の対応にはどの様な共通点があるか。五十字以内の現代語で説明せよ。



『十訓抄』

◆◆通釈◆◆

成方という笛吹きがいました。御堂入道殿より大丸という笛を頂戴して吹いていました。立派な物（笛）なので、伏見修理大夫俊綱朝臣が（この笛を）欲しがって、「千石で買おう。」といったのですが、（成方は笛を）売らなかったので、（伏見修理大夫俊綱朝臣は）たくらんで使いの者を（成方のもとに）行かせて、「（成方が笛を）売るという旨のことを言った。」と嘘を言うように言いつけておいて、成方を呼びつけて、「（お前が私に）笛を渡そうと言ったのは、（私の）望むところである。」とよろこんで、値段は（お前の）言い値にしよう。」と、（そして）「ぜひとも買おう。」と言ったので、成方は顔色を失って、「そのようなことは申しません。」と言いました。（伏見修理大夫俊綱朝臣は）この使いの者を呼びつけて、お尋ねになると、「本当に申しました。」と（使いの者）が言うので、俊綱はおおいに怒って、「人を欺こうとするとは、その罪は軽くはないぞ。」といって、（成方を）雑色所へ下げて、木馬に乗せようとする間に、成方が言うことには、「身のお暇を頂き、この笛を持ってまいりましょう。」と言ったので、（俊綱は成方に）人をつけてやりました。（成方が）帰ってきて、腰から笛を抜き出して言うことには、「このせいで、このような目にあっている。薄情な笛だ。」と、軒先に下りて、石をとって、灰のように（なるまで）打ち砕いてしまいました。伏見修理大夫俊綱朝臣の、笛を横取りしようと思う心が強いために、いろいろな計画を練ったのですが、（笛がこなごなになってしまった）今となっては言っても仕方がないので、（成方を）罰する必要もなく、解放しました。後に聞くことには、そうではない（本物ではない）笛を大丸といって打ち砕き、本当の大丸は支障なく吹いていたので、伏見修理大夫俊綱朝臣のばかけだことだということで（この話は）済んでしまいました。はじめはひどく勢い込んでいましたが、最終的には（成方に）出し抜かれてしまいました。昔、趙の文王が、和氏の璧（という名玉）を、宝として（持って）いました。秦の昭王は、どうにかしてこの玉を自分のものにしたいものだと思い、使者を（趙に行くよう）命じて、十五の城を分配するので、玉（和氏の璧）と取り換えよう。と申し上げました。趙王は、ひどく悲嘆しびっくりして、藺相如を使者として、玉を持たせて秦に行かせました。昭王は、（玉を手に）持って返そうともしなかったので、（藺相如は）策略を思い巡らして、「心身を清めた人でなければ、この玉を取ること（があって）はなりません。」と言って、玉を頼み求め（うまくだまして）受け取ったあと、急に怒った表情をして、柱をにらんで、玉を叩き割ろうとしました。そのときに秦王は、（藺相如のことを）許して（趙の国に）返しました。玉こそ粉々にしてはいませんが、成方の有様は、互いに似ています。

次の文章を読んであとの問いに答えよ。

成方といふ笛吹きアありけり。御堂入道殿より大丸といふ笛を賜はりて吹きけり。めでたきものなれば、伏見修理大夫俊綱朝臣欲しがりて、「千石に買はむ。」とありけるを、売らざりければ、たばかりて使ひをやりて、「売るべきの由言ひけり。」と虚言を言ひつけて、成方を召して、「笛得させむと言ひける、本意なり。」とよろこびて、「価はイ乞ふによるべし。」とて、「ただ買ひに買はむ。」と言ひければ、成方①色を失ひて、「②さる事申さず。」と言ふ。この使ひを召し迎へて、尋ねAらるるに、「まさしく申し候ふ。」と言ふほどに、俊綱大きに怒りて、「人を欺きすかすは、その咎軽からぬ事なり。」とて、雑色所へ下して、木馬に乗せむとする間、成方曰はく、「身の暇を給はりて、この笛を持ちて参るBべし。」と言ひければ、人をつけてつかはす。帰り来て、腰より笛を抜き出でて言ふやう、「このゆゑにこそ、③かかる目は見れ。④情けなき笛なり。」とて、軒のもとに下りて、石を取りて、灰のごとくに打ち砕きつ。大夫、笛を取らCむと思ふ心の深さにこそ、様々かまへけれ、今は

ウ言ふかひなければ、戒むるに及ばずして、⑤追ひ放ちにけり。後に聞けば、あらぬ笛を大丸とて打ち砕きて、もとの大丸はささいなく吹きゆきければ、大夫のエをここにてやみDにけり。はじめは、⑥ゆゆしくはやりごちたりけれど、⑦つひに出だしぬかれにけり。

昔、趙の文王、和氏が璧、宝とせり。秦の昭王、いかでこの玉を得てしがなと思ひて、使ひを遣はして、「十五城を分かちて、玉に換へん。」と聞こゆ。趙王、大きに嘆き驚きて、藺相如を使ひとして、玉を持たせて秦にやる。昭王、うち取りて返さむともせざりければ、謀をめぐらして、「潔斎の人にあらざれば、この玉を取ることなし。」と言ひて、玉を請ひ取りてのち、にはかに怒れる色をなして、柱をにらみて、玉をうち割らむとす。時に秦王、許して返しEてけり。⑧玉をこそ砕かねども、成方が風情、あひ似たり。

（『十訓抄』より）

問一　波線A～Eの助動詞の意味と活用形をそれぞれ選択肢より選んで答えよ。同じ記号を二度以上用いてもよい。

A「らるる」【ス・エ】　　B「べし」【ケ・ウ】　　C「む」【ケ・ウ】

D「に」【ク・イ】　　E「て」【ク・イ】

〈選択肢〉

ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　終止形　　エ　連体形　　オ　已然形　　カ　命令形

キ　打消　　ク　完了　　ケ　意志　　コ　婉曲　　サ　推量　　シ　当然

ス　尊敬　　セ　受身　　ソ　断定

問二　二重傍線ア～エの用言の活用の種類と活用形を答えよ。

ア「あり」　活用の種類【ラ行変格活用】　活用形【連用】形

イ「乞ふ」　活用の種類【ハ行四段活用】　活用形【連体】形

ウ「言ふかひなけれ」　活用の種類【ク活用】　活用形【已然】形

エ「をこに」　活用の種類【ナリ活用】　活用形【連用】形

問三　傍線①「色を失ひて」とあるが、成方はどの様な状態か。三十字以内の現代語で説明せよ。

笛を買うという俊綱の言葉に驚き、血の気が引いている様子。（二十八字）

問四　傍線②「さる事」の具体的内容を、解答欄に適する形で、古文中より五字以内で書き抜け。

【笛得させむ　　】と言ったこと。

問五　傍線③「かかる目」の具体的内容を三十字以内の現代語で説明せよ。

俊綱の言いがかりにより無実の罪で拷問されそうになること。（二十八字）

問六　傍線④「情けなき笛」の現代語訳として適当なものを選択肢より選べ。

ア　みすぼらしい笛
イ　薄情な笛
ウ　無風流な笛
エ　名残惜しい笛
オ　恐ろしい笛

問七　（1）傍線⑤「追ひ放ちにけり」とあるが、誰が誰を解放したのか。空欄に適語を書け。

【俊綱　　】が【成方　　】を解放した。

（2）解放した理由を三十字以内の現代語で説明せよ。

笛が手に入らない以上、もはや成方を罰する必要がないため。（二十八字）

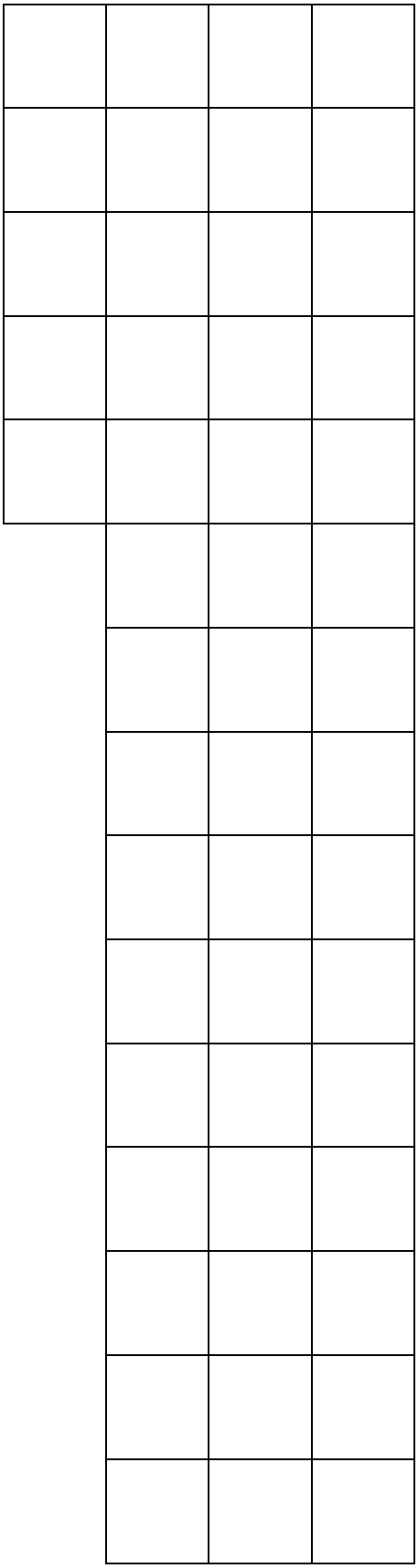
問八　傍線⑥「ゆゆしくはやりごちたりけれど」を現代語訳せよ。

【たいそう勇み足になって［いきり立って／勢い込んで］いたが】

問九　傍線⑦「出しぬかれにけり」とあるが、成方はどの様にして窮地を脱することができたか。現代語で簡潔に説明せよ。

【俊綱の欲しがっている大丸を打ち砕いたように見せかけた。】

問十　傍線⑧「玉をこそ砕かねども、成方が風情、あひ似たり」とあるが、成方と藺相如の対応にはどの様な共通点があるか。五十字以内の現代語で説明せよ。



宝を強引に奪おうとする相手に対し、宝そのものを破壊しようと見せかけることで、宝を無傷で守り抜いた点。（五十字）



Komaba Tuition Centre

KOMABA